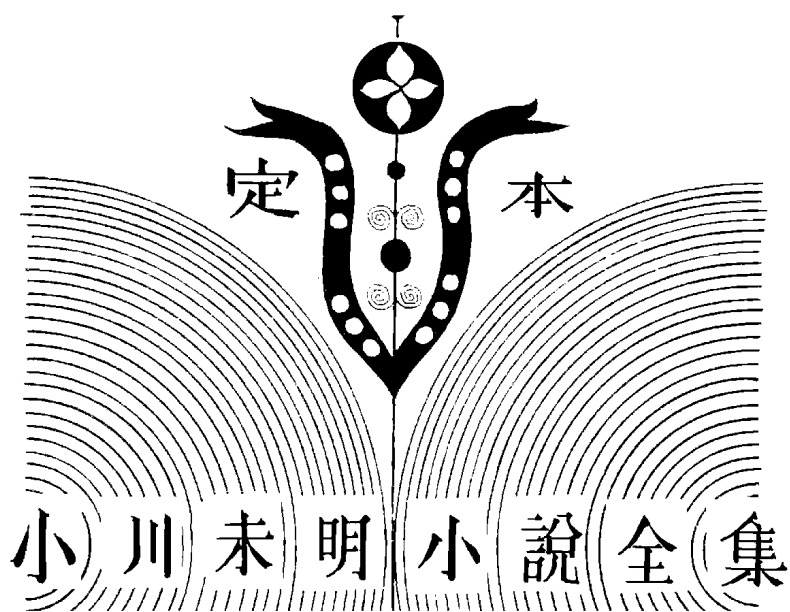






定本 小川未明小説全集 5
小説集 V



昭和54年8月6日 第1刷発行

著者 小川未明

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽 2-12-21

郵便番号 112

電話 東京(03)945-1111

振替 東京8-3930

印刷所 廣済堂印刷株式会社

双美印刷株式会社

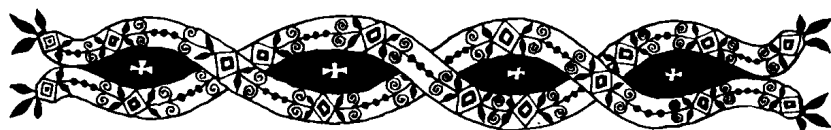
製本所 島田製本株式会社

定価 3500円

©岡上鈴江 1979 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。(児一)

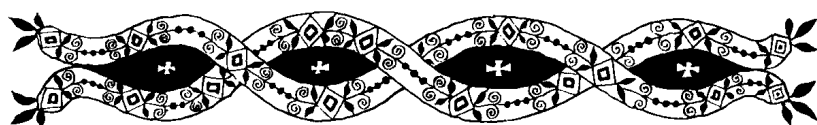
0393-448251-2253 (0)



定本 小川未明小説全集 5

小説集 V

目次



早春の夜	7
雪穴	13
彼等の行く方へ	16
血の車輪	30
患者の幻覺	37
黒い河	47
面白味のない社會	57
停車場近く	64
奇怪な幻想	71
説明出來ざる事實	76
もう不思議でない	81
男の話をきく群衆	93
愛によつて育つ	100
自殺者	107
忘れ難き男	113



踏切番の幻影	290
君は信ずるか	282
堤防を突破する浪	265
白刃に戯る火	253
嘘をつかなかつたら	245
新聞紙	241
雪の上の賭博	226
青い絲	211
地底へ歩く	182
火を點ず	177
私の手記	169
夜の群	156
風に戦ぐ青樹	150
秋	143
傷付いた人	129



土地繁榮

304

獨逸人形

327

問題にされない群

341

暴風と月の妖術

348

野鼠から起つた話

365

死海から來た人

369

眞實を踏みにじる

373

彼等の悲哀と自負

377

都會の午後五時

382

解説

紅野敏郎

389

装丁

武井武雄

定本 小川未明小説全集 第五卷

小説集 V

早春の夜

二人は酔つてゐた。レストランを出た時は、もう夜が更けてゐた。町は既に戸を閉して眠靜まつてゐた。たゞ軒燈の火だけが茫然と點つてゐた。けれど酒が體に廻つてゐるので、吹く風がまだ寒かつたけれど、少しも其れを感じないばかりか結局熱した頬や、頭に觸れるのが心地よかつた。

Kの方が一層酔つてゐた。押し倒すやうな様子をしてレストランの扉を開けると先に外の闇の裡にのめり出た。其の扉が後へ返らぬうちにSが出ようとして、扉の反動を身に受けたが兩手で其れを押さへた。Kは轉げさうにふら／＼とした足取りであつたが、Sは其れ程でもなかつた。

Kには殆んど自分を忘れる程、酔ふことがあつたけれ

ど、Sはいくら酒を飲んでも自分を忘れてしまふことは出来なかつた。

電車はいつの間にか杜絶えてゐた。而して街上は何等の音がなく寂然としてゐた。二人はこの電車路の眞中に立つた。電車が前から後からも決して來ないといふ確信はどんなに安心を與へたであらう。同時に、いかに電車が通つてゐるといふことは、平常氣付かないけれど心の上の重荷になつてゐるかゞ知られたのである。

Kは嬉しさうにして、前後をのび／＼とした氣持で眺めた。何方を見ても町が果しなくつゞいてゐた。其の間をうす暗い地の上に光つて線路が走つてゐた。兩側の町は遠くなると其の先きが合してゐるやうに、電燈の火は線路の行手に、さながら群がる星のやうに閃めいてゐた。前を見ても、後を見ても、是等の燈火の影より眼に映るものがなかつた。

「あゝ氣持が好い。實に奇麗だね。」と、Kが大きな聲で言つた。彼は、ちつと立つてゐようとしたが、足が定まらなかつた。彼はいきなりSの肩に手をかけた。

「電車がない。もう大分遅いだらう。随分長く彼處にゐて飲んだもんだね。」と、Sが言つた。其の間、Kは彼

方の燈火を見詰てゐた。而して、彼の心の中でかう思つてゐた。「俺は酔つてゐない。かうして路の上に立つてゐても茫然としてゐるのでない。俺の眼はよく何ものをも見分けることが出来る。彼處に見える燈火の色を現に見分けてゐる。ぼんやりとした球燈、水のやうに冴えた火、青其れに赤、あの赤い燈火は、電車の停留場に點いてゐるのだ。俺の意識は確かである。けれど實に好い氣持だ。今の俺は、どんな大膽なことでもなし得られる。しかし其れは決して酒に酔つてゐるからするのではない。」と、Kは考へると何となくこの夜をこの儘ですます氣になれなかつた。

「もつと歩かう！」と、Kは叫んだ。

「何處へ？ 其れにもう遅いから、歸らうぢやないか。」と、Sは言つて、Kの手を握つた。

「この電車路を何處までも歩いて行かうぢやないか。無限につゞいてゐるやうに見えるが、きつと何處かで杜絶えてしまふだらう。其處まで行つて見よう。」と、Kは反對に強くSの手を引いた。

「僕はそんなことに、君程興味を持つことが出来んよ。折角、酔つてゐるのが風に當つて醒めてしまふよ。」と、

Sが言つた。

「まあ、いゝからもつと歩かう。醒めたらまた何處かで飲まうぢやないか。歸つたつて何が楽しいことがあるんだ。かうして感激に動いてゐる間だけが愉快なんだよ。」と、Kが幾分眞面目になつて言ひながら、ふら／＼とした足付きで、獨り彼方に行かうとした。

「僕は、この好い氣持で歸つてゆつくり安眠がしたいんだ。明日朝、太陽が上つた頃にやつと眼が醒めると、どんなに氣持がいゝか分らない。僕は、人間にとつての最上の幸福は生きることゝ安眠にあると思つてゐるのだ。君は歩かうと思ふなら歩きたまへ。しかし風を引きたまふな。」と、Sは笑ひながら言つた。

二人の心は、其處で分れてしまつた。今迄共に酒を飲んで語り、愉快であつたのも、畢竟一瞬時前の過去の夢に過ぎなかつた。此時二人は共に其のことを心に感じた。けれど、より深く、獨り寂しい街の中を歩いて行かうとするKに感じられたのであつた。

これもまた刹那の感じに過ぎなかつた。KはSと話したことも、共に酒を飲んだことも、また別れたこともすべて遠い夢のやうな氣持がした。彼は、殆んど我を忘れて

たやうに心は全身の知覺を痺れさせるやうな酣醉に浸つてゐた。

けれど、彼の腦髓の中には酔はぬものがあつた。其れはすべての思想を支配する意識でない。あるものに對しては全く盲目であり、あるものに對しては明敏なる意識であつた。彼は、尙ほこの際死といふことを考へ、生といふことを考へてゐたのだ。

ちやうど生といふものは、この線路のやうなものであらう。幾多な美しい、華かな光りに取巻かれてゐる。而して、其れは無限に決して終る時がないやうに思はれてゐる。其れが果して何うであらうか。やがて自分はこれに等しい幻滅を眼前に望むことが出来るであらうと思つた。

實際この生といふものは頼りないものだ。寂しいものだ。時に、あまりに暗く、悲惨なのを考へることがある。而して、いかなる美しいものによつても、またいかなる誘惑によつてもこの苦痛を忘れ、自覺を鈍らされることがないだらう。其處には一つの逃れる路がある。其れは自殺だ。けれど、この刹那の生がいかに貴いものであるかを知つたなら、何うして自から命を斷つといふこ

とが出来得よう。誰しも、暴風雨の暗夜に曠野の路を辿る者は、何れ程手に下げてゐる提燈の火を有難く貴く思ふか知れない。而して、このはかない火を何ものにも換へ難いと思ふかも知れない。これを體で護り、袂で護つて消すまいと苦心をするであらう。永劫の死の前に閃く人間の命は、ちやうどこれと同じなのだ。

Kは平常自殺について考へる。其れは、あまりこの生といふものが貴く、刹那的で、しかもはかないと考へるためであつた。うすい高價な陶器の壺を掌に取つて愛撫する時に、いつかは其の破滅と思はぬものがあらう。而して、其の不安な念は、却つて一思ひにこの瞬間に於て石に擲き付けて微塵にしてしまつた方が結局氣が樂になると考へないだらうか。しかし、其れは妄想に過ぎないことだ。Kは其の愚を笑つて、すべての、自殺した人間の愚を笑つたのであつた。

「しかし、今なら其の自殺も出来る。」と、彼は思つた。彼の體は暗かつた。今なら、どんな冷い深い水の中へでも入れると思つた。彼の氣持は何ものをも恐れなかつた。今なら、身を躍らして、火の中へでも飛び込まれると思つた。Kは夜の寂然とした町の中を線路について何

處までも歩いて行つた。一旦心にきめたことは意地でも實行して見せるといふ偏した考へが酔つてゐたけれど、頭の何處かにあつて、彼の行爲を支配してゐた。

彼は堪らなく痛快になつて、驅けて見たくなつた。子供のやうに叫んで、走り出した。兩側の黒い建物が自分の後からついて来るやうに流れた。彼は其れを見るのが面白い氣持がして、走りながら右を見たり、左を眺めたり、しまひにはたゞ前方のうす青い空を望んで、其の空に抱き付かうとする勢で走りつづけた。けれど、尙ほ兩側の軒燈の火が後から後から彼について追ひかけて来るのを感じた。

「オー。」と、彼はまた血の躍るのを押へ切れなくて叫んだ。其の聲は眠靜つた四邊^(あたり)に反響した。彼は鎖を斷つた囚徒のやうに、檻の中から出た野獸のやうに、自由に感じたのであつた。

彼は大きな建物を右手に見た。其の建物の中には無數の燈火が點つてゐた。電車の車庫であることが直に分つた。其處で電車の線路は切れてゐた。けれど尙ほ町はつづいてゐた。Kは町の中を歩いた。町は急に暗くなつた。而して、家數が疎になつて、遂に町も盡きてしまつた。

空の色が急にはつきりと鮮かな色に冴えて見られた。Kは前方を望むと曠野が遠くまでつづいてゐた。野には、林や、森があつた。枯れた木の枝に星が鈴生^(すずなり)になつてゐるやうに見えた。其等の星は一つ／＼靈魂があるやうに黙つて瞬いてゐた。

Kは、また此處に来て、暫く立止つたまゝ死といふことを考へた。かうして、曾ては若く、愉快に、華かで、また幸福であつた生が突然いつの間にか絶たれてしまふのだ。其れは無限と思はれた線路が切れ、また町が盡きると同じやうに、人間の命が絶えるのであると思つた。しかし、斯うして、町が盡き、線路は切れても、尙ほ先には曠野がつづいてゐる。清淨な夜の空はこれを被ひ、星は終夜眠らずに伽をしてゐる。かうしてこの景色は此處で終つてしまつたのでない。然らば人間の死の後にはいかなる生活が開けるであらうか。智識が其れを知らないばかりでなく、空想すら其れを眼に描くことが出来なかつた。

「この野原を行ける處まで行つて見よう。」と、彼は自分に向つて叫んだ。星の光りによつて幽^(かすか)に照らされた路を歩きつづけた。彼は幾たび誤つて、窪地の中に轉げ

落ちようとしたか知れなかつた。

三月の始であつたから、草は既に地を破つて芽ぐむ仕度をしてゐた。其の氣分は暗い野を包んだ空氣の中に感じられた。やがて葉を出すであらう。而して、花を咲き、ある時節には實を結ぶであらう。この地上がさまじまな色彩で飾られ、小鳥が空に囀り、蜜蜂が花から花を飛び、林の間には若者の笑聲が聞えるのも遠くないことだと思はれた。

Kは未來に春があり、夏があることを思つた。すべての苦痛の後に、寂寞の後に來るべき悦樂と賑やかさと思つた。而して、堪らなくかうして、生きてゐて、其れを見られるのが、どれ程幸福のことであるかと考へられた。

「しかし更に新しい幸福や、愉快といふやうなものがあらうか？ 忘れた時分に、人間は同じことを繰返してゐるに過ぎないのでないか。この上生きてゐるといふ必要が何處にあらう。畢竟生きてゐるといふことは澤山な苦痛と實に少ない快樂の連續に過ぎない。」

Kは、酒の酔が幾分か醒めかゝつてゐた。けれど、尙ほ歩みつゞけた。

不意にけたゝましい轟きがして、前方の土手の上を黒い貨物列車が過ぎた。びつくりして、彼は頭を上げて其の列車を見送つた。赤い砲彈のやうな燈火が闇の中を過ぎて、後にはうす赤い煙の影が暫らくの間一筋ぱんやりとして残つてゐた。其の響きが遠くなつて、聞えなくなるまで彼は耳を傾けてゐた。やがて天地はもとの靜寂に返つた。

彼は足許の草の上に腰を下した。始めて足の疲れを覺えたやうに、兩足を投げ出して茫然として溜息を洩らしながら、輝く星の光りを見た。彼はこれと同じやうな景色を曾て何處かで一度見たことのあるやうな氣持がした。其れは生れる前の世界であつたか、其れとも夢の中であつたか幽に記憶に残つてゐた。若し生前に於てゝあつたとしたら、これが其時の最後の記憶であつたかも知れない。而して、すべての人間の生活といふものが、二び同じことを繰り返すものであるとしたなら、もう自分の生活はこれで盡きるのでないかといふやうな悲しい氣持がしたのである。

Kは、黙つて空の星を數へるやうに、異つた光りを放つ星を心に止めて眺めてゐた。其のうちがつくりと頭を

垂れて、其儘居眠りをしたのであつた。

星座は静かに移つた。彼の眠りを妨げないやうに。而して、此時、東方の空には、黎明の氣が動き始めた。やがて地上の生活を呼び醒すやうに。

——一九一九・二作——

雪 穴

絲萩が風になびいて、青々とした地面を拂ひ、軒下に白い花を付けた南天に虹がたかつて雪のやうに其の花がこぼれる時分には、毎日夕日が赤く燃えて、五彩の雲が高らかに空を亂れて飛ぶのです。

其頃、祇園のお祭があつて、御輿が町の中を通るのである。其の笛の音や、太鼓の音がしばらく、夢幻的な七月の眞晝頃の静寂を震蕩して、空には、燃える太陽が、さながら巴旦杏のやうに爛れてゐます。

町の四辻の處に立つて、白い、短かい、シャツを着た子供が、

「ヒヤツコイ、ヒヤツコイ。」と言つて、雪を賣つてゐる。

雪 穴

雪は二つの籠の中に入られて天秤棒で擔がれて來たも

のです。四角な大きな雪の塊が眞青な萱の葉で隙間なく包まれてゐた。其の萱は何處か河に近い野原の中から取つて來たのである。

「オイ、ヒヤコイや、二厘くれ。」と、いふと、子供は、萱を除けて小形な鋸で中から白く露はれた花崗石のやうな雪の塊を細長く切つて籠の中に敷いてある萱の葉を抜いて、其れに捲いて渡すのです。受けた男は、其の萱を握つて雪を噛ちる。

まだ、其頃は物價が安く、一厘二厘といふ風に穴の明いた錢が使はれてゐました。男は片手で扇子を煽ぎながら懷に風を入れて、片手で解けかゝる天然の雪に口を付けて、水を吸つてゐる。今は、この町でも、天然の雪は魚を漬けるのにしか用ひない。けれど、其の時分氷といふものはなかつたのです。

彼方では、群衆がどよめいてゐました。

西風の強く吹く時分に、寺の杉の森からは枯枝が落ちて來て、森陰に堀つてあつた深い大きな穴底に重なり合ひます。杉葉を拾ひに來た、近くの町や、村の子供等は其の穴を覗いただけで、滅多に降りて行く者がなかつた程、其の穴は恐ろしく見えた。

これは、雪穴でありました。

冬、二月か、三月の始めになつて、だん／＼雪が結晶して來る時分を見はかつて、幾十人かの入夫は、集まつて田圃や野原の中から一番奇麗に見える、而して、汚れてゐない雪を櫓に積んで來て、この穴の中に投り込むのでした。而して、彼等は幾日もこの仕事にかゝつた。しまひに、この穴は全く雪で埋るばかりでなく、其の上にも、其の上にも積み上げられて雪の小山が造られる。大抵の高かさに達した時、もはや彼等は積むのを止めて、棒を四方から建て、新しい藁や、筵で其の雪の山を幾重にも巻くのでした。やがて雪の山は下から上まで藁や、筵に掩はれて、其處には憂鬱な大きな不思議な小舎が出來るのです。

六月の中頃になると、其の小舎の口が開かれる。すると、町や、村の子供や、大人が箆を抱へて雪を買ひにやつて來ました。

其れと同時に、村に、町に暑い日盛りから、日暮方にかけて、

「ヒヤコイ、ヒヤコイ。」と雪を賣つて歩く聲が聞かれたのであります。

圃には、枝豆が實つてゐます。風の吹き様によつて、蟬の聲が近くなつたり、遠くなつたりしてゐました。

町の方から、おかつば頭の七つばかりの女の子が、自分の體の半分もありさうな箆を抱へて、手に穴の明いた、赤錆のついた錢を幾つか握つて、寺の横路を入つて、雪穴の方へ歩いて來ました。

其の女の子は、やがて雪穴の入口に達すると立止つた。平常なら其の入口から三四尺奥の處に男が一人ゐて、雪を取次でくれるのであるが、其の日に限つて、其處には誰もゐなかつた。女の子は、しばらく躊躇してゐたが、やがて入口から奥の方へ入つて行きました。

既に、幾月かの間に解けた雪は大部分小舎の頂きからは低くなつてゐたばかりでなく、この頂きの尖つた建物の四方には、小さな隙間が幾つも出來てゐて、其處から光線が内部に射込んでゐたので、全く小舎の中は暗くはなかつたのです。其れよりも少女は急に涼しくなつたのを感じた。一足、二足と雪穴の中に入つて行くうちに、全く體中が寒くなつてしまつた。足許には、板や、筵が敷いてあつて、ぢかに雪を踏まないやうにしてある。小舎の口を開いてから、早くも幾日か経つたので、餘程奥の